

山本周五郎

樅ノ木は残った*



樅ノ木は残つた*

山本周五郎

新潮社版

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1967

河盛好蔵
奥野健男 監修
土岐雄三

縦ノ木は残った * (山本周五郎小説全集 8)

昭和四十二年五月三十日発行
昭和五十三年七月三十日三十一刷

定価 一、一〇〇円

著者 山本周五郎
著作権者 清水きん
発行者 佐藤亮一
印刷所 三晃印刷株式会社
製本所 大口製本株式会社
発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(03)二六六一五一一
編集部(03)二六六一五四一一
振替 東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

樅ノ木は残った

*

第一部

序の章

万治三年七月十八日。

幕府の老中から通知があつて、伊達陸奥守の一族伊達兵部少輔、同じく宿老の大条兵庫、茂庭周防、片倉小十郎、原田甲斐。そして、伊達家の親族に当る立花飛騨守ら六人が、老中酒井雅楽頭の邸へ出頭した。

酒井邸には雅楽頭のほかに、同じく老中の阿部豊後守と稻葉美濃守が列坐していて、左のよう

な申し渡しがあつた。

「伊達むつの守、かねがね不作法の儀、上聞に達し、不届におぼしめさる、よつてまず廻塞まかりあるべく、跡式の儀はかさねて仰せいださるべし」

こういう意味の譴責であつたが、

「但し堀ざらいの普請はつづけるように」

ということが付け加えられた。

堀ざらいとは、その年の三月から幕府の命令で、伊達家が担当していた、小石川堀の修築工事をさすものである。

申し渡しのと、太田摂津守が上使を命ぜられ、立花飛騨守と伊達兵部との三人で、伊達家の上屋敷へゆき、陸奥守綱宗にその旨を伝えた。

綱宗はすぐに品川の下屋敷へ移った。

明くる七月十九日の夜。

伊達家の浜屋敷の内にある坂本八郎左衛門の住居へ、二人の訪問者があった。坂本は浪人から取立てられた者で、食禄は六百石、目付役を勤めていた。

坂本は二人に会った。

二人は密談があるようによそおい隙をみて坂本に襲いかかった。坂本は抜きあわせるひまもなく、その場で即死した。二人は坂本の家人に、「上意討である」と云って、たち去った。

同じ夜、同じ時刻。

やはり浜屋敷の内にある、渡辺九郎左衛門の住居に、二人の訪問者があった。渡辺も浪人から取立てられた者で、正田流の槍の名手であり、刀法にも非凡な腕があった。食禄は二百四十石、家中の士に槍術を教えていた。

渡辺は会うのを拒んだ。

訪問したのは渡辺金兵衛と渡辺七兵衛といい、二人とも小人頭であるが、どちらも親しいつきあいはないし、そんな時刻に訪問されるような、用件があるとは思えなかった。

「いや、急用があるのです」二人は取次の者に云った。

「こんど御門札を新らしくするので、印鑑をいただきたいのです、明朝から新らしい御門札になるので、ぜひとも今夜のうちに印鑑をいただかなければならないのです」

まえの日に、藩主が幕府から逼塞を命ぜられて、品川の下屋敷へ移った。しぜん門札の更新ということもあり得るので、渡辺は二人に会うことにした。

常着の上へ袴をはき、脇差だけ差し、印鑑の入った鹿皮の小さな袋を持って、渡辺九郎左衛門は客間へ出ていった。二人の訪問者は、膝の前に帳面のような物を置いて、坐っていた。渡辺はかれらを見たが、二人のようすに変わったところはなかった。

「――御苦勞」と云って渡辺は坐った。

「夜分にあがりまして」と渡辺金兵衛が云った。そして七兵衛と共に両手をついて、低く辞儀をした。

渡辺は袋を膝の上に置いた。低く辞儀をした二人の右手は、それぞれの刀をつかんだ。

渡辺は袋の口の紐をゆるめ、中から印鑑を出そうとした。そのとき金兵衛が片膝立ちになり、刀をすばやく取り直して、抜き打ちに渡辺へ斬りつけた。刀は渡辺の右の肩を斬った。

「なにをする」

渡辺は腰の脇差へ手をかけながら立った。その手には印鑑の袋が絡まっていた。袋の口の紐が指に絡まっていたのである、――渡辺が立ったとき、七兵衛が左から突を入れた。渡辺はとっさに脇差を抜いて横に払った。七兵衛の刀は渡辺の腰を刺し、渡辺の刀は七兵衛の肩を斬った。

「なんのためだ」と渡辺が叫んだ。

そのとき右から、金兵衛が踏み込んだ。そして、腰を刺されて体の崩れた渡辺の脾胃を十分に

斬った。渡辺は襖へよろけかかり、襖といっしょに次の間へ転げこんだ。金兵衛は追っていつて、もう一刀、頸から胸にかけて斬った。渡辺は「うん」と呻いた。七兵衛は肩の傷を押えながら客間のまん中に立っていた。

そこへ三人の若侍と、一人の若い女が走って来た。侍たちは廊下の左から、——女は奥のほうから走って来て、客間の前で立竦んだ。

「騒ぐな、上意討だ」

金兵衛が云った。彼は渡辺九郎左衛門が死んだのを慥かめてから、客間のほうへ出て来た。

「あとから検視が来る、それまで死躰に手を付けてはならない、家の中もそのまま、慎しんで待っておれ」

女が叫び声をあげた。

金兵衛が女を見た。女は十八九歳の、小柄な軀つきで、勝ち気らしい、だが美しい顔だちをしていた。女は金兵衛の脇を走りぬけ、渡辺の死躰のところへいつて、死躰にとり縋った。そして声をあげて泣きだした。

「あれはなに者だ」と金兵衛が訊いた。

三人の若侍たちはすぐには答えなかった。しかしようやく、その中の一人が云った。

「側女のみやという者です」

金兵衛は刀を拭きながら七兵衛を見た。

「大丈夫、浅手だ」と七兵衛が云った。そして、二人はたち去った。

同じ夜の、ほぼ同じ時刻。

伊達家の桜田上屋敷内にある畑与右衛門の住居へ、三人の訪問者があった。畑は納戸役（禄高不明）で夫婦の間に宇乃^{うの}という十三歳の娘と、虎之助という六歳の男子があった。訪問者と聞いたとき、畑はふと不吉な予感におそわれた。漠然^{ぼくぜん}としたものではあったが、まったく無根拠ではなかった。彼は妻をよんで訊いた。

「子供たちは寝たか」

「はい、寝ております」

「すぐに起こせ」と畑は云った、「二人とも起こして、おまえ宮本へつれてゆけ、おまえがつれてゆくんぞ」

「こんな時刻にですか」

「わけはあとで話す、いそいでゆけ」

妻女は立っていった。彼女は子供達を起こした。どちらもまだ眠ってはいなかった。虎之助はとび起きて、よろこんで云った。

「どうするの、また遊ぶの」

「静かになさいな」

宇乃がそう云った。宇乃は十三歳であるが、軀つきも大きく、顔もおとなびてみえ、気持もませていた。彼女は母親のようすで、なにかただならぬ事が起こったのだと直感した。それで着替えを終ったときには、もっとおとなびた顔つきになった。

「遊ぶんじゃないの」と虎之助が母親に訊いた。

母親は帯をしめてやりながら「静かになさいな」と云った。虎之助は姉の顔を見て、そして黙った。支度のできた二人をつれて妻女が裏から家を出たとき、客間のほうで高い叫び声と、足踏

みをするような物音が聞えた。

「あれ、なに、お母さま」

虎之助が云った。妻女は怯えたように娘の顔を見た。宇乃はおちついた声で、母親をなだめるように云った。

「まいりましょう、お母さま」

妻女は歩きだした。外は暗かった。まっ暗で、爪先も見えないようであった。宇乃はしゃんとしていた、彼女には母親の怯えているのがわかり、自分がしっかりしていなければだめだと思った。

「お母さま、どこへゆきますの」

宇乃が訊いた。母親が答えた。

「え、ああ、宮本さまよ」

「ただゆけばよろしいの」

「あなた、いっておくれか」

母親は家へ戻りたいようすであった。それが宇乃にはよくわかった。宇乃は云った。

「ええ大丈夫よ、お母さま」

「ではそうしておくれ」

母親は握っていた虎之助の手を宇乃にわたした。そしてなにか云いたげに、娘のほうをすかし見たが、虎之助を押しやって云った。

「いっておくれ」

彼女は家のほうへ引返した。

宇乃は弟の手を握って、闇のなかを歩いていった。虎之助の手はふるえていた。彼も幼くないな

りに、ようやく不安を感じだし、それをがまんしているのだということが、宇乃にわかった。

宮本又市は三百石の無役で、無役のまま藩主綱宗の側近に仕えていた。住居は小者長屋の近くにあった。姉弟が掃除井戸のところまでいったとき、向うから走って来た者があった。足袋はだしだったので、足音が聞えず、宇乃がそうと気づいて、よけようとしたとき、激しく突当られてよろめいた。

「お姉さま」と虎之助が叫んで、姉にしがみついた。

相手もびっくりしたらしい、脇のほうへよけながら、かすれた声で云った。

「誰だ、——」

宇乃はその声を知っていた。それは宮本又市の弟で、十六歳になる新八の声であった。宇乃は虎之助を抱きよせながら云った。

「わたくしと弟ですの」

「宇乃さんか」新八は喘いで、宇乃のほうへ近よった。

「宇乃さん、貴女の家へゆくところだ」

「わたくしも」

「えっ、貴女も——」

新八が荒い息をした。宇乃が弟といっしょに出て来たことで、彼には事情がわかったらしい。新八は絶望したように云った。

「ではだめだ、外へ出よう」

「外へですって」

「大変なことが起こるらしい、兄は畑さんに知らせて、それから浜屋敷の渡辺さんのところへゆ

けと云った」

「わたくし弟といっしょですよ」

「不浄門から出よう」

宇乃は弟をひきよせた。

「さあ虎之助さん、あたしに負ぶさるのよ」

「いやだ、自分で歩くよ」

虎之助は姉の手を拒んだ。

新八がせきたて、いっしょに走りだしたが、すぐに五人の人たちにゆくてを塞がれた。かれらはお厩のほうから来た。提灯を持った二人の小者と、ほかに侍が三人いた。かれらはとつぜんお厩のほうから現われて、こちらの三人をとり巻いた。

新八は畑姉弟をうしろに庇った。虎之助は姉にしがみついた。

「こんな処でなにしている」と侍の一人が云った。

小者たちが左右から提灯をさしつけた。呼びかけた侍は三十歳ばかりで、固肥りの小柄な男だった。声は低く、穏やかであった。

「私は、私たちは、——」

新八は吃った。すると侍が宇乃に云った。

「そちらは畑どのの御姉弟だな」

「ええそうです」と新八が吃りながら云った、「そして私は、宮本の新八です」

侍は宇乃を見、新八を見た。

「私は原田家の村山喜兵衛という者だが」とその侍は新八に云った、「こんな時刻にこんな処で

なにをしているのだ」

「私にはわかりません」新八はふるえながら云った、「私は兄に云われて、客が二人来たのですが、兄は私に畑さんへ知らせにゆけと云ったのです、畑さんへ知らせて、それから浜屋敷へゆけと云われたので」

「こんな時刻にか」と村山喜兵衛が云った、「こんな時刻に御門を出られると思うのか」

「不浄門から出るつもりでした。不浄門に兄の知っている人がいるものですから」

「いったいそれは、——」ともう一人の侍が云った、「それはどういうことだ、なにがあったのだ、なんのために浜屋敷などへゆくのだ」

「わかりません」と新八はまた吃った、彼の声はいまにも泣きだしそうに聞えた、「兄のところへ客が来たのです、私にはわかりませんけれど、なにか大変なことが起こりそうでした、兄のようすではなにか尋常でないことが起こるように思えました」

「矢崎、——」と村山喜兵衛がもう一人の侍を見た。矢崎という若侍は顔^{かほ}いて、小走りに向うへ走っていった。村山喜兵衛は新八に云った。

「こちらへおいでなさい」

「どうするんですか」

「いまようすを見にやったから、どんなぐあいかわかるまで、向うで待つがいいだろう」

村山喜兵衛は虎之助のほうへ歩みよった。

「坊、いっしょにおじさんのうちへゆこう」

虎之助は姉を見た。喜兵衛は蹠^{かか}んで云った。

「抱いて行ってやろう」

「歩いていく」と虎之助は云った。

村山喜兵衛は、三人を、自分の小屋へつれていった。それは、宿老原田甲斐の住居に付属する、長屋の一と棟であつた。

三人は部屋へあがつた。新八はひどく昂奮していた。顔色もまっ蒼だし、唇も白く乾いて、そうして、絶えずぶるぶると軀をふるわせていた。灯のあかりでそのようすを見て、宇乃はまた自分はいさかりしていなければならない、と思つた。

「おうちへ帰ろう」

虎之助がそつと云つた。宇乃は弟の背中をさすつた。

「おとなしくしていてね」

「おうちへ帰ろう」

「そんなことを云わないの、もうすぐお母さまが迎えにいらっしゃつてよ」

「お母さまが来るのか」

「ええ、いらっしゃるわ」

村山喜兵衛は戸口にいた。

虎之助が云つた。

「お母さま、ほんとに、迎えに来るのか」

「そうよ、だからおとなしく待つてゐるのよ」

「泣かないでか」

宇乃は聞き耳をたてた。

戸口にいた村山喜兵衛が、戸口から出ていった。矢崎という侍が戻つたらしい、小屋は狭いの

で、戸口の外で二人の話すのが、宇乃の耳にもあらまし聞えて来た。宮本新八は立とうとした。彼にも聞えたのか、それとも聞くために出ようとしたのか、立ちかけて、宇乃の顔を見た。

宇乃はそつと首を振った。

新八はそのまま坐った。

「二人とも斬られたって」

戸口の外で、村山喜兵衛が云った。

「どちらもです」

矢崎舎人が云った。彼は喜兵衛よりずっと若く、まだ二十一歳であった。

「宮本又市も畑与右衛門も斬られました、畑では妻女も斬られたそうです」

「妻女まで斬った」

「邪魔をしたので斬られたということですよ」

「なに者が斬ったのだ」

「わかりません」と矢崎舎人が云った、「畑どのへ来たのは三人、宮本へ来たのは二人、どちらも

家人の知らない顔で、名もなのらなかったといひます」

「意趣も云わずにか」

「いや、上意討だと云ったそうです」

「上意討だって、——」と村山喜兵衛が訊き返した。

「たしかに、両家ともそう云ったといひています」

「ばかなことを」と喜兵衛が云った、「殿は昨日、御逼塞になった、お上といえるのは御幼君だけだ、まだお二歳の亀千代さまが、そんなことをお命じになるわけではない」

「かれらはそう申したということです」

「これは穩やかでないぞ」と村山喜兵衛が云った、「昨日の今日、上意を僭称してこんな事が起こるのは尋常ではない、おれはすぐ御家老に申上げよう、あの三人をたのむぞ」

「承知しました」

「誰が来ても渡すな」

「承知しました」と矢崎舎人が云った。

村山喜兵衛はそのまま、原田家の住居のほうへ去った。部屋の中で、新八と宇乃はこれを聞いた。全部ではないが要点は殆んど聞きとれた。新八はまた宇乃を見た。宇乃はしずかな動作で、そつと弟の肩を抱きよせ、そうして、なだめるように云った。

「そうよ、泣かないでね」

虎之助は姉を見あげた。彼はすっかり眠そうな顔をしていた。

女 客

七月二十五日の早朝。

原田甲斐宗輔は、自分の居間で手紙を書いていた。彼は六尺ちかい背丈で、色の浅黒い、温和な顔だちをしている。濃い眉はやや尻あがりであるが、静かな色を湛えた眼は尻さがりであった。おもながで、額が高く、その額に三筋の皺があり、その皺が四十二歳という年齢を示しているようにであった。